

大問	配点	単元	難易度	テーマ	目安時間(分)	特徴	2026年度 本試験 平均得点率	2025年度 本試験 平均得点率
全体	100	—	昨年並	—	70	—	54.52%	51.56%
第1問	15	図形と方程式	昨年並	2円の交点を通る直線、領域	10	<ul style="list-style-type: none"> ・2025年度の第1問は三角関数であったが、今年は図形と方程式であった ・2025年度の追試験でもこの分野は出題されていたが、本試験では2022年度以来 ・(2)(iv)は、(iii)での条件を変えたときの考察を問うており、共通テストの頻出パターンの一つ 	56.17%	50.83%
第2問	15	三角関数	昨年並	三角関数の最大値	10	<ul style="list-style-type: none"> ・2025年度の第2問は指数・対数関数であったが、今年は三角関数であった ・(1)で和積の公式を証明し、それを用いて以後の問いを考えていく ・(2)で2つの関数の和、(3)で3つの関数の和と数を増やして考察していく ・この形式は共通テストらしいパターンで、ヒントとしての会話も入っていた 	50.25%	53.42%
第3問	22	微分・積分の考え	昨年並	3次関数の極値、グラフ、面積	14	<ul style="list-style-type: none"> ・微分や積分の計算も含まれているものの、計算量は少ない ・条件を数式で表現したり、図形的に解釈する設問が主という、共通テストにおけるこの分野での最近の出題傾向通りの問題であった 	62.47%	61.66%
第4問 [選択問題]	16	数列	昨年並	階差数列、数列の和	12	<ul style="list-style-type: none"> ・最初に階差数列の定義を見せている ・(1)は具体的に項を求めて公式を問う問題から、公式を用いて一般項を求める ・(2)は一般項が(1次の多項式)\times(2のn乗)とあらわされる初項から第n項までの和を求める ・(3)は、求める和の一般項が(2次の多項式)\times(2のn乗)に変わり、(2)の考察を踏まえて解くという、次数をあげたものの考察 ・第2問と同様の共通テストらしいパターン 	50.56%	46.86%
第5問 [選択問題]	16	統計的な推測	昨年並	正規分布、母比率に対する仮説検定	12	<ul style="list-style-type: none"> ・(2)までは例年通りの流れ ・(3)は標本数が変わったときに仮説検定の結果が変わるかどうかの考察で、2回の仮説検定は初出題 ・会話も入っていたが、こちらはヒントではなく、問題のストーリー付けのための会話であった 	44.80%	36.95%
第6問 [選択問題]	16	ベクトル	昨年並	ベクトル方程式	12	<ul style="list-style-type: none"> ・本試験では空間ベクトルの出題が続いていたが、久しぶりに平面ベクトルの出題であった ・(3)では、条件を変えたときの考察を行う共通テストらしいパターンであった 	56.05%	49.14%
第7問 [選択問題]	16	複素数平面	昨年並	複素数平面上の点の軌跡、楕円	12	<ul style="list-style-type: none"> ・2025年度の追試験と同様の「複素数平面」を題材に「平面上の曲線」についても問う問題であった ・(3)(ii)は、(2)の結果や式の形を振り返って考えることで時間短縮ができる問題で、共通テストらしい出題であった 	56.96%	54.09%